

要介護高齢女性における 装いの自己認識に関する探索的研究

——生活歴から立ち現れる装いに着目して——

片桐 資津子

本稿では、1990年代後半に特養ホームを利用していた要介護高齢女性を対象に、装いに対する主観的意味について探索し、装いを通じたケアの在り方を考究する。先行研究において、認知症の高齢者への化粧療法の効果や、要介護者へのファッション療法の効果が報告されている。だが、これらの既存研究は、今現在の装いに着目した考察に限定されており、生活歴に着目して装いに質的分析を施した社会的な研究は見当たらない。装いを通じたケアを考察するためには、画一的な装いを推奨して高齢者に効果を及ぼそうとするのではなく、個々の要介護者が自らの装いをどのように認識しているのかを議論する必要がある。本稿では、一見、装いに無関心だと思われるケースの生活歴にも着目し、生活歴に潜在化している装いに多様なパターンがあることを明らかにした。

1 生活歴のなかの装いへの着眼

本稿の目的は、1990年代後半に、特養ホームで施設ケアを受けていた要介護高齢女性が自らの装いをどのように認識しているのかを明らかにし、ケア現場において生活支援の一つである衣の部分の福祉に必要な要点を提示することである。その際、高齢期における現前の装いに留まらず、生活歴に潜在化する装いにも着目し、高齢者自身がそれらの装いをどのように捉えているのかということについて、生活歴を分析することによって考究する。

一般に、おしゃれや装いという行為は、老若男女を問わず、前向きな気持ちにさせたり、積極性を促したりすることがある（前田 2009; 石田 1995）。女性の場合には、化粧、ヘアスタイル、服装を自由自在に変えることで、自分自身の精神まで変わったような心持ちになる。装うという行為は「セルフ・イメージを補強し、相互に調整するために、共通の可視性のスタイル」（鷲

田 1996: 89）を加工することである。ゆえに、装いは個人史における社会的アイデンティティの変換の時期と重なり、生き方を支える服になり得るという捉え方が可能である（鷲田 1996）。

高齢者と装いについても同様のことがいえる。たとえば要介護高齢女性に化粧や衣服で装いを施すことによって本人の気持ちが明るくなり、笑顔が多くみられるといった心理的な効果や、自分から他者に話しかけたり、好奇心が強くなったりといった社会的な効果が確認されている（山岸 2000）。こういった化粧療法やファッション療法の、要介護高齢者の普段の生活全般にも波及効果をもたらすこともある。このように化粧を含めた装いを議論することは要介護高齢者の生活の質を高める可能性がある。

要介護高齢女性の装いというテーマは、施設ケアの現場において重視される利用者本位のケア、すなわち個別ケア¹への関心の高まりのなかで重要性を増している。これまで、装いは、食事・入浴・排泄といったケアに比べて、生理

的な必要性が低いという認識から、それほど重視されてこなかった。しかし、生活の質という観点から、個別ケアを重視する潮流のなかで、ケア現場において装い支援に関心をもたれるようになってきた。

だが、利用者に対して「装いにこだわるように」と画一的に働きかけることは妥当とはいえない。なぜなら食事や入浴のように、提供するケア・支援の中身がある程度決まっているものと異なり、高齢者における装いは、その関心の度合いに個人差があるように思われるからだ。高齢者が納得のいく装いをするための支援は、ケア生活全般への意欲が高まるという理由から重要なのだが、それはいかにして可能なのだろうか。個別ケアの観点から、利用者の装いを支援する際に重要なことは、個別的な装いに対する思いを尊重するかたちで、利用者にとって唯一無二の装いを引き出すという点である。

そうした個別的な装いに対する思いを見ていくために、本稿では、施設利用の要介護高齢女性を対象を限定して、彼女たちの生活歴から立ち現れる装いに着目する。

一般に装いとは、外観や身なりを美しく飾り整える行為を意味する。客観的な美醜を意識した流行やおしゃれと言い換えることもできる。だが、本稿で議論する装いの定義は、客観的に美しくなることを目的とせず、外観や身なりを整える行為とする。幼少期から現在まで、自己形成しながら蓄積してきた装いという意味で、「自己連続性の感覚」(Twigg 2010: 227)を伴っている。つまり「個人が経験してきた事実としての装い」(Twigg 2010: 224)といえる。

この定義に依拠すれば、装うことはアイデンティティや自己の表現と関係している(Twigg 2004, 2008, 2010)²。装いの意味を把握するためには、本人の装いに対する意味づ

けや、これまでの人生において装いがどのような位置にあったのかをみていかななくてはならない。これが、本稿で生活歴に着目する意味である。対象者が自らの装いをどのように認識しているのかを、現在の装いのみならず過去の装いにも着眼して解明していく。

生活歴から立ち現れてくる装いには大きく2つの側面がある。生活歴から顕在化した装いと生活歴に潜在化した装いである。前者は、目の前で観察可能な現在の装いである。後者は本人ですら忘れかけているような過去の装いであり、生活歴のなかに埋もれている。具体的にいえば要介護高齢者が幼少時代から慣れ親しんできた装いである。目の前で観察可能ではない後者の装いを捉えていくことが装い支援にとって重要である。したがって生活歴への着目は、潜在化した装いを把握する際に、特に有効性を発揮する。

以上のような装いを明らかにするため、まずは先行研究の検討を通して、要介護高齢女性の生活歴に着目した装い研究の必要性を論じたうえで、本稿の分析視角を提示する(2節)。続いて調査の概要として、調査対象、生活歴の聞き取り方法、データの特徴について言及する(3節)。次に、Kさん、Uさん、Tさんの3人の高齢女性における生活歴を、装い関連の事柄に限定するかたちで再構成したものをデータとして用いながら、現在の装いの志向性を同化と異化の軸で分析と考察をおこなう(4節)。同様にして、過去の装いの認識を肯定と否定の軸で分析し考察する(5節)。最後に結論と課題をまとめる(6節)。

2 分析視角

本節では、生活歴から立ち現れる装いを議論するための分析視角を提示するため、まずは装い

に関する既存研究を紹介することから始めたい。

心理学や社会心理学の分野において、高齢者と装いの研究として挙げられるのは、認知症の高齢女性に化粧を施すことによって情動が活性化するという実験による統計調査である（辻 1997; 伊波・浜・西田 1998）。これらの研究は画期的で有意義なものである。しかし、いずれも条件を統制したうえで化粧や装いに力点を置いており、化粧を施した効果が確認され、統計的に有意差が認められたとしても、その理由は説明されない。さらには過去の化粧経験が説明変数として加えられているものの、化粧経験の有無に関する項目にとどまっており、当該高齢女性が過去にどのような化粧経験をしていたのかといった中身には踏み込んでいない。

また、活動的な高齢女性を対象にして、化粧や服装でイメージチェンジをすることが、自己認識や健康状態のあり方にかなる効果を与えるかということを探した研究（Graham and Kligman 1984, 1985; Rexbye and Povlsen 2007）もある。これらの研究では、装いの概念は、女性らしさや性的魅力を含んだものとして議論されている。すなわち老衰する物理的身体を否定的に捉え、女性が老衰の過程で喪失する美しさを補完するものとして、もしくは若いときの魅力を再現するものとして装いが捉えられている。

しかしながらこれらの研究では、要介護高齢女性は議論の対象外とされる。病気や障害を抱えて物理的身体が極端に老衰し、精神的な落ち込みが激しいため客観的な美への回帰願望をもつところではないからだ。物理的身体が老衰し、精神的にもふさぎ込み、家族等との関係も疎遠で、現状に必ずしも満足しているわけではない施設の利用者においては、装いはまったく意味のないことなのだろうか。

こうした問題を考えていくためには、高

齢女性が「経験してきた事実としての装い」（Twigg 2010）を念頭に議論を展開していく必要がある。トゥイッグによると、高齢女性が経験してきた装いは生活歴のなかに含まれており、「習慣的な意思表示、態度、認識、階層」（Twigg 2010）が埋め込まれている。こうした指摘を踏まえ、本稿では生活歴から立ち現れる装いを、要介護高齢女性における装いの自己認識を明らかにすることで探っていく。

以上のような生活歴のなかにある装いの意味を分析する際に、本稿では、現在の装いと過去の装いの両方に注目する。前者は、普段のケア生活で身につけている装いであり、既存研究においても調査対象となっている。他方、後者は生活歴における過去——たとえば幼少期、成人期、中年期——において、経験してきた事実としての装いを意味する。

まず現在の装いについては、同化か異化かという分析軸から考察を行う。北山によれば、装いには「他人と同じにしようとする契機（同化意志）」と「他人と異なろうとする契機（異化意志）」（北山 1996: 112）がある。同化の装いは、周囲の環境や規範に同調することを志向し、こだわりや執着をもたない。これに対して、異化の装いは、他者との差異化を志向し、アイデンティティや生き方を支える。先に紹介した化粧療法に関する既存研究において、その効果がみられたのは異化の装いであると判断できる。しかし、要介護の高齢女性の装いをみていくと、自ら納得して同化している場合も観察される。さらには、装いに関する療法に効果がみられないとされた同化の装いに関して、既存研究では、その理由については明らかにされていないのだが、「同化」と「異化」の分析軸を採用することで、これらの点にアプローチすることができる。

生活歴に注目した考察においてより重要な

のは、過去の装いの認識の把握である。本稿では「肯定的認識」なのか「否定的認識」なのかという軸を設けて過去の生活歴をみていく。ここでいう肯定的認識とは、本人が現在において過去の装いを肯定的に捉えていることを意味し、否定的認識とは、これとは逆に、過去の装いを否定的に捉えていることを意味する。この分析視角を採用する理由は、現在の装い認識を過去の装い認識の仕方との関連で把握できるからである。現在において装いに無関心で、装いに関する療法に効果がみられない場合を分析する際に、過去の装いを肯定的に認識していると、それが自己肯定感と一体化し、現在の装いにも何らかの影響を及ぼしていると考えられる。

現在からみて要介護高齢者が過去の装いをどのように認識しているのか、ということの本稿では考究する。そこで第1に、同じ対象者であっても、過去の装いを複数のパターンで認識していると想像できるが、そこには肯定的と否定的の両認識が混在していることもある。第2には、肯定的もしくは否定的、いずれの認識であっても、それが過去の装いから継続するものとして、すなわち現前の装いとして看取できる装いもあれば、できない装いもある。前者は「生活歴から顕在化する装い」、後者は「生活歴に潜在化する装い」といえる。これらの分析視角は、先行研究で概念的に導出された「経験してきた事実としての装い」(Twigg 2010)をどのように認識しているか、すなわちその主観的意味を探究するために妥当なものといえる。

3 調査の概要

3-1 調査の方法と対象

調査方法は生活歴³の聞き取りである。この

調査は1997年から98年にかけて実施⁴された(片桐1999)。調査対象者はKさん、Uさん、Tさんである。当時、対象者が「入所」していた施設は、北海道札幌市近郊に位置する措置時代に典型的な特養ホームであった。この頃、介護保険制度の施行を目前に、装いに関する施設側の多様なニーズにこたえようと、要介護高齢者が利用する施設への出張美容サービス業者が増加しつつあり(山井2001)、生活の質を高める観点から「美容福祉」(西本1999:60)という言葉も登場するなど、新しい個別ケア実現への社会的要請も高まっていた。しかし当該施設ではこういったサービスは提供されていなかった。美容ボランティアからの関わりもなかった。

調査対象者として3人の高齢女性を選定した理由は、当該施設の施設長と生活指導員の協力を得て、妥当であると判断したためである。3人に関して共通点と相違点をまとめると、まず、共通点としては3人とも不本意ながら措置時代の特養ホームに入所していること、いずれも要介護状態のため歩行器・車椅子での移動生活であったこと、そして会話が可能であったことが挙げられる。相違点は、UさんとTさんは聞き取り当時、装いに関心があるように見受けられず、ひとりKさんのみ、おしゃれだという評判がケア職員のあいだに存在していたことである。

最初の対象者をKさんに定めた理由は、持病である心臓病は治ったものの、白内障、難聴、足の痛みを抱えていたにもかかわらず、Kさんが装いに気を使っていたからである。2人目の対象者であるUさんは当時、家族関係の悩みと身体的苦痛により精神的にふさぎ込んでいた。とはいえ所有している衣類等に関しては、普段身につけていなかったものの、上質のものが目立ち、経済的な豊かさ⁵を感じさせた。これに対して、Tさんは物質的には裕福でないが、

豊かな知識と表現力があり、趣味は新墾^{にいほり}短歌⁶という女性で、日常的にはおしゃれに関心がある印象は全くなかった。つまり、3人とも要介護という共通点をもちながら、装いは全く異なるタイプであったため、比較分析のために対象者として選定した⁷。なお、調査倫理に配慮して、インタビューの内容はすべて対象者に許可を得てカセットテープに録音した。

3-2 思い出の写真を利用した生活歴の聞き取り調査

本調査の実施において工夫した点は、対象者に事前に準備してもらった思い出の写真ツールとして活用した点である。準備できる写真が実際に存在しなくても、対象者がはっきりと認識できる場合には、その写真イメージをもとに装いの話題を提供してくれた。これにより3人の高齢女性から、比較的円滑に装い歴を引き出すことができた。これは「写真誘い出しインタビュー」(Flick 1996=2002: 191)であり、その目的とするところは視覚的資料としての写真をインタビュー実施の補助として利用することである。

対象者から聞き取った生活歴の全データは、Kさんが42字×47行×8.8頁、Uさんが42字×47行×10.5頁、Tさんが42字×47行×13.3頁、平均で21,500字程度であった。これらの生活歴を、装いの観点から抽出して再構成した。その際、対象者が繰り返し語ったエピソードや、他のエピソードよりも強調して語られたと思われるものを筆者が選定し、便宜上、時系列的に再構成して番号をつけた。Kさんは【1】～【10】(うち過去の装いは【1】～【6】)、Uさんは【11】～【19】(うち過去の装いは【11】～【17】)、そしてTさんは【20】～【29】(うち過去の装いは【20】～【28】)とした。ただし、装いに直接的に関係していないエピソードであ

っても、基本的属性などについては、適宜、データとして加えた。

4 現在の装い——同化か異化か

まず現在の装いについてみていこう。本節では、同化と異化の分析軸で装いの認識の仕方を考察していく。なお、便宜上、データ中、同化の装いには下線を引き、異化の装いには丸傍点を付した。まずはKさんの分析から始めたい。

【9】特に気に入っているのは薄紫色のカーディガン。施設に売店が来て、そのときに自分で選んで買った。人からは「似合うね」って言われる。嬉しい。家族同然のS会の夫婦に自分が入る予定のお墓にお花見を兼ねて連れていってもらったときこの服を着ていった。みんなに「いいね、いいね」と言われた。これはおしゃれ着。

【10】体調が悪くても、好きな服を着ると、気持ちがシャンとする。やる気が出てくる。病気に負けていられないと思える。S会の人からはおしゃれで若々しいとか、年より若いねと言われる。

おしゃれに気を遣うKさんが気に入っている装いは「薄紫色のカーディガン」【9】であった。彼女はこのカーディガンを着ると「周囲からの評判も良くて嬉しい」という心境になった。自分で選んで買ったので、異化の装いであると解釈した。また、Kさんは「好きな服」【10】を着ると「気持ちがシャンとする」し「やる気が出てくる」という。要介護で身体的に苦しい状況にあっても、能動的である実態が読み取れる。さらに「病気に負けていられない」という強い気持ちにもなっている。これらの装いは、

障害や病気のいずれにも打ち勝とうとする強さをもっていると判断できるため、異化の装いといえる。

しかしKさんは、異化の装いだけでなく、データ【7】にあるように、同化の装いにおいても「気分がいい」「ストレスもなくなる」という前向きで快適な気持ちを表現している。

【7】ズボンよりスカートのほうが好きだ。動作がしやすいから。年をとるとトイレが近くなる。ズボンだと面倒くさくて不自由だ。スカートをはいていると気分がいい。ストレスもなくなる。

【8】着るものは、もう何年もあるもので間に合わせている。派手になったりする。年にふさわしい、ちょうどいいものを買うことができない。地味なものを持っていない。しょっちゅう買えない。我慢している。洋服はすべて既製品である。着物を着ることはない。たくさん持っている。和服を着たいとは思わない。

Kさんの同化の装いは、「動作がしやすい装い」【7】であり、トイレのときズボンよりもスカートのほうが「ストレスがなく気分がいい」という。この場合、Kさんが主体的にこだわって「好きな服」【10】を着るのではない。排泄がしやすいという機能性を重視し、周囲の環境に同調しているとの見方ができるため、ここでは「動作がしやすい装い」を同化の装いと判断した。Kさんは「動作がしやすい装い」【7】を快適であると感じている。

だが同化の装いでも、これとは反対に「あるもので間に合わせる装い」【8】については適当な服を持っていないため我慢しており、率直に不満を述べている。つまりKさんにおける同化

の装いに関するデータからは、前者の快適さと後者の不満の両側面があることがわかる。

この相反する事実は、どう解釈するべきか。それは本人が納得して同化の装いをしているか、納得しないで同化の装いをしているかという違いであると判断できる。まず両者とも大まかにいえば同化の装いと解釈できるのだが、「動作がしやすい装い」は、Kさんが納得して選んだから快適だと感じている。これに対して「あるもので間に合わせる装い」は納得していない状態で選ばざるを得なかったからKさんは不満に思っている。つまり、同化の装いに、「納得」か「不服」かという軸を導入すると、Kさんの同化の装いにおける相反する事実の説明が可能となる。すなわちKさんの「動作がしやすい装い」は納得—同化の装いであり、「あるもので間に合わせる装い」は不服—同化の装いであると解釈できる。

次にUさんの場合を検討してみよう。

【18】新しい服を着ると嬉しい。気持ちが晴れ晴れする。外国人の服を着て温泉に行きたい。いまは車椅子での生活だ。リハビリは疲れるから嫌だ。洋服を着るとき寮母さんの手助けが必要だから着たい服を着るのは難しい。普段は手がかからない服を着ている。いい服を着ると気分が明るくなる。薄紫色のワンピースがお気に入り。一人では着られない。自分で着るものは自分で買う。

【19】一番の楽しみは子どもたちと会うことだ。長男、次男、長女だ。夫を亡くしたいま、子どもたちと会うことが生き甲斐だ。長男はよく来てくれる。長女は全然来てくれない。次男は遠いので頻繁には来られない。

Uさんの場合、同化の装いに該当するのは「手がかからない服」【18】である。手がかかる服だと職員の手助けが必要になる。つまり、彼女はケア職員に迷惑をかけたくないという配慮から、同化の装いに甘んじている。甘んじているので不服—同化の装いであると判断できる。

Uさんにとっての異化の装いは「新しい服」【18】や「いい服」【18】である。こういった装いをすると、「嬉しい」し、「気持ちが晴れ晴れする」し「気分が明るくなる」。しかし日常的にUさんがお気に入りの「薄紫色のワンピース」【18】のような異化の装いをすることは困難である。なぜならUさんはワンピースを一人で着ることが出来ないからだ。それゆえUさんは、普段は「手がかからない服」で我慢している。要するに現前のUさんは、本音では、「新しい服」や「いい服」といったような異化の装いを切望しているのに、実際には、「手がかからない服」である不服—同化の装いを選ばざるを得ない状況にあるといえる。

最後にTさんにおける現在の装いはどのように認識されているのか。

【29】いま化粧はしたいとは思わない。いい洋服を着たいとは思わない。子どもたちが持ってきてくれる服を、ただ着るだけ。もらえば、楽しく着させてもらっている。どなたからもらっても、嬉しい。選り好みしない。おしゃれに興味ない。

Tさんについては本人も「おしゃれに興味ない」と明確に述べていることからわかるように、異化の装いに該当するデータは見当たらなかった。着るものは何でもかまわないという。ただしTさんにとって同化の装いは「子ども

たちが持ってくる服」【29】であり、「楽しく着させてもらう」という能動的側面をみせている。装いにこだわりがなく周囲が勧めるままのものを身につけるという意味から同化であり、これを自分なりに納得して楽しく着させてもらうと語っているので、納得—同化の装いであると判断できる。

以上、現在の装いを分析してきたが、Tさんについては、Kさんにみられたような、「薄紫色のカーディガン」「好きな服」といった異化の装いというより、むしろ「子どもたちが持ってくる服」のような納得した装いが確認された。ここには身近な他者への好意が見受けられる。他方、Uさんについては、ケア職員に迷惑をかけたくないという他者への配慮から、不服の装いに甘んじている実態が示された。分析結果については、次頁の表1にまとめた。

5 生活歴に潜在化している装い——肯定か否定か

5-1 Kさんの場合

次に、もう1つの分析視角である「生活歴に潜在化している装い」について、Kさんの場合から分析していく。装いの自己認識の分析軸は肯定的認識と否定的認識である。なお、便宜上、肯定的認識の装いには下線を、否定的認識の装いには丸傍点を付して表記した。

【1】父が酒乱だったので母はいつも苦勞していた。Kさんは身体が弱かったため、父からたたかれなかった。早く成長して母を安心させたかった。着るものは和服だった。学校でも着物と袴だった。母がなんとか手に入れてくれた。いやでも好きでもなかつた。母のことを考えると自分の好みを言え

表1 現在の装いに関する分析結果

| 装い | Kさん | Uさん | Tさん |
|-------|---|--|---------------------------------|
| 納得-同化 | 動作がしやすい装い【8】 →ストレスがなく気分がいい | なし | 子どもたちが持つてくる服【29】 →楽しく着させてもらう |
| 不服-同化 | あるもので間に合わせる装い【7】 →我慢している | 手がかからない服【18】 →職員の手助けが必要になる | なし |
| 異化 | ①薄紫色のカーディガン【9】 →周囲から評判も良く嬉しい ②好きな装い【10】 →気持ちがシャンとする、やる気が出てくる、病気に負けていられない | ①新しい服【18】 →気持ちが晴れ晴れする ②いい服【18】 →気分が明るくなる ③薄紫色のワンピース【18】 →お気に入りだ | なし |

なかつた。母が着る服を作ってくれた。
 【2】母と兄のおかげで高等小学校に進学した。将来の夢は、1つは健康であること、2つ目は母を早く安心させて楽をさせること、3つ目は和裁で生計を立てることだった。
 【3】卒業後、和裁を習い始めた。和裁をしているときは体調を忘れるほど夢中になれた。自分では、作るのが難しい帯に挑戦したいと思った。他所行きの着物をこしらえたいと思った。自分で作った着物を自分で着たいと思った。好きな装いは、年にふさわしい、地味でもなく派手でもないものだった。生地はあまり固くもなく柔らかくもないものが好きだった。薄い色が好きだった。
 【4】19歳のとき心臓が悪くなった。困ったと思って泣いた。それで結婚も遅れた。嫁ぎ先は貧しく、生活費が足りなかった。そこで他所の仕立てものをして、幾分でもお小遣いを稼ぎ、姑さんにあげていた。

実家の母までは手がまわらなかった。結婚してから楽しいと思ったことは一度もなかった。結婚して半年後に死別した。

Kさんの場合、幼少の頃から「いやでも好きでもない装い」【1】や「自分の好みと言えない装い」【1】に甘んじてきた。確かに装いのセンスを含めた好みに関しては、思い通りの服を身につけることができなかつたため、否定的認識の装いといえるが、それだけではない。これらの装いは酒乱の父親という不遇な生活と重なり合っているため、否定的認識の装いと判断できる。しかし、服を作ってくれたのは大好きな母親で、肯定的な存在であった。ここに複雑さがみとれる。こうした複雑さを内包しながら、Kさんはデータ【3】にあるように、好きな服を「自分でこしらえたい」という思いを強くしていったと考えられる。否定的認識を肯定的なものに変化させていき、「他所行きの着物」【3】を作りたいという思いが彼女の将来の夢や希望になっていった。生活歴のなかに潜在化

している装いに否定的要素が含まれていたからこそ、Kさんはそれを乗り越えて、好きな服を「自分でこしらえたい」と熱望するに至ったと分析できる。

【5】和裁とつきそい婦の仕事で生計を立てた。心臓が悪かったおかげで、つきそうときの患者さんの気持ちがすごく理解できた。回復した患者さんと家族を含めた交流を続けていた。その関係でS会の信仰にふれた。63歳で正式に信仰の道に入った。S会の幹部のご夫婦と家族同様のつきあいをしている。お墓も買った。

【6】信仰のおかげで90歳のとき心臓病が治った。精神的な強さのせいだと思った。身寄りがなく何でも自分一人でやらずに済むという気持ちが強かった。お医者さんもびっくりしていた。でも足が痛み出した。それで手術した。歩行器があれば歩ける。耳も聞こえない。補聴器が必要だ。聞こえないと憂うつだ。目も悪い。白内障で2回手術した。眼鏡があれば見える。あちこち故障が出てきた。

データ【5】や【6】にあるように、確かにKさんの精神的な強さは、装いへのこだわりだけで説明できるわけではない。S会という信仰とそこで出会った家族同然の夫妻の存在も重要である。しかし、ここで注目したいのは、前節のデータ【9】、すなわち彼らと一緒に外出したとき、自分で選んで購入した「薄紫色のカーディガン」【9】を着ていったという事実である。

以上より、Kさんの生活歴から立ち現れる装いとは、幼少の頃に「自分の好みが言えない装い」しかできなかったという否定的認識から

脱したことで、すなわち「好きな装い」を実現していく過程であると見て取れる。

5-2 Uさんの場合

幼少の頃に裕福な家庭に育ったUさんの場合は、肯定的な装いを経験したあとに否定的な装いを経験したと要約できる。これは否定的経験から肯定的経験へと装いを昇華させたKさんとは対照的である。以下で具体的に分析していこう。

【11】生家は裕福で末っ子だった。至れり尽くせりの生活を送った。学芸会のとき革靴を履いて綺麗で新しい洋服を着てみんなの前で歌った。「外国人の服を着て歌に出ている」という評判だった。お金持ちだったから、もてはやされた。毎日違う洋服を着ていた。よく着ていたのは胸に刺繍の入った茶色のワンピースであった。

【12】13歳で無事に女学校に入学した。でも無理して入ったから勉強についていくのに必死だった。学校は制服だった。ハイカラな靴だった。女学校時代は太っていたがおしゃれだった。流行を追って目立っていた。兄弟の友達から噂された。

【13】親は女学校の先生になることをすすめた。でもとにかく勉強が嫌いだった。勉強するのが嫌だったから早く結婚したかった。それで卒業後は針や裁縫を習った。着ていた洋服は既製品だけではなく、オーダーメイドのものもあった。

裕福な家庭で生まれ育ったUさんには、幼少の頃に「綺麗で新しい服」【11】や「外国人の服」【11】を着て「もてはやされた」経験がある。胸に刺繍の入った「茶色のワンピース」

【11】は、Uさんの裕福さの証であった。「ハイカラな靴」【12】を履いて「流行を追う装い」【12】をしていたためUさんは目立つ存在だった。「目立つ装い」【12】によりUさんは「兄弟の友達から噂される喜び」を感じていた。これらの装いは喜びや優越感をもたらしていたと考えられるため、Uさんにとって肯定的認識の装いといえる。

しかし成人したあとは、否定的経験が続く。

【14】東京の親戚の家で世話になりながら、針や裁縫を続けた。24歳で結婚し、28歳で出産した。夫も喜んでくれた。しかし29歳のとき夫の戦死が知らされた。

【15】戦争中は着るものも配給だった。戦争で両親も豊かな生活もすべて失った。長男は栄養失調になり、耳が聞こえなくなった。一人だったら死んでしまいたいと思った。長男を守るのは自分しかないと思った。長男には長襦袢を裂いて着せた。

【16】生き残った兄夫婦を頼ることにした。汽車で向かう途中、お腹がすいて、持っていたメリンスと食べ物と交換した。兄との再会を前に、あまりにみすぼらしい格好だったので、兄の近所に恥ずかしかった。汽車を降りた後、身なりを整えた。

【17】戦後は食べるために農家の嫁になった。田舎の農家でカマもクワも初めてだった。周りから笑われた。石にかじりついてでも我慢した。農家をしてからは針仕事をいっさいしなかった。ボロを着ていた。でも他所に出かけるときはひどい格好だと恥ずかしいと思ったので既製品の洋服を買って着た。

敗戦後、Uさんは装い認識を否定的なもの

として受け止め始めていた。なぜなら「みすぼらしい格好」【16】、「ボロの装い」【17】、「ひどい格好」【17】をせざるを得ない状況になったからだ。それまで何不自由なく暮らしていたのだが敗戦により大きく生活状況が変わることとなった。そのため装いについて「恥ずかしい」思いをしていたことが読み取れる。幼少の頃の肯定的な装い経験が、かえって否定的認識を際立たせることになったと分析できる。

Uさんにとっての生活歴から立ち現れる装いとは何か。それは「綺麗で新しい服」「茶色のワンピース」「ハイカラな靴」「目立つ装い」といったような幼少期の装いである。彼女はこれらの装いを肯定的なものとして認識している。Uさんの幼少期における肯定的な装い経験は、豊かさの象徴であり、所与のものであったからだ。だが戦争で物質的豊かさのすべてを失った。豊かな生活を提供してくれた両親、夫といった大事な他者も失った。その後、食べていくために農家に嫁いだUさんは、データ【17】にあるように、「ボロ」【17】や「ひどい格好」【17】で不慣れな農業に従事することになり、苦労を重ねた。したがってこれらは否定的認識の装いがUさんの生活歴から立ち現れたと判断できるだろう。

しかしUさんの生活歴から立ち現れる装いは、もう1つある。それは「手がかからない服」である。中年期において、Uさんにとって重要な点は、心の支えとして豊かさの象徴である装いをしたのではなく、「恥ずかしい」思いをしないために、身なりを整えたということであった。それは不特定多数の他者から後ろ指をさされないための装いであった。裕福な家庭で生まれ育ったことを誇りとするUさんが、世話になっている施設に寄付した事実を目を向ければ、他人に迷惑をかけている負い

目を軽減することに力を注いでいたことがわかる。したがってUさんの生活歴から立ち現れる装いには、ケア職員に迷惑をかけたくないという価値観により「手がかからない服」も含まれるといえよう。

5-3 Tさんの場合

最後に、Tさんの生活歴から立ち現れる装いをみてみよう。Tさんは幼少の頃に肯定的な装い経験をしており、この点は、以下で見ると、Uさんと類似していると思われる。しかし、Uさんの場合は成人したあとに過酷な生活と否定的認識の装いが一体化していたのに対して、Tさんの場合には、肯定・否定の両面を切り替えるような装いをしていた。

【20】母親は男勝りで頼りがいがあったが、着るものは自分で縫って着ていた。実家が農家だったため家で勉強をしていると母親に怒られた。普段は母が縫ってくれた元禄というものを着ていた。袖が丸型でそれに綿を入れてくれた。なかにはメリヤスのピンク色の股引を着ていた。これはお店で買った。母からはこういう格好をしなさいとか、こういう格好をしてはいけないとか、言われたことはなかった。ただ身だしなみという意味で、汚れた格好をしていたらダメだと言われた。母親がすることは何でも良いと思っていた。

【21】運動会のあとは、今でいうドレス、当時は夏服という袖の長いものを着た。腰にバンドがあった。ちょっと厚手のものだった。その服が好きだった。気分がよかった。色は明るい灰色だった。胸に赤い刺繍の模様があった。嬉しくて一晩眠れなかった。運動会でビリだったが服

は買ってくれた。楽しくて楽しくて仕方なかった。

【22】靴も母が用意してくれた。花の赤い刺繍が入った靴だった。綺麗だった。母が買ってくれた。母は子どもの心をつかんでいた。綺麗な靴をさげて楽しかった。落ち込んでいてもうきうきした。

【23】無事に尋常小学校を卒業した。式には母がおたもとを縫ってくれた。メリンス生地だった。赤い模様がついていた。嬉しかった。みんなが「いいねえ、いいねえ」と言って、頭をなでてくれた。友達は着ていなかった。自分だけだった。だから目立った。注目されて褒められて子ども心にいい気持ちだった。

幼少の頃、Tさんは「母が縫ってくれる装い」【20】や「友達が着ていない装い」【23】をして「良いと思っていた」、つまり満足していた。さらには「赤い刺繍」【21】【22】や「赤い模様」【23】のある装いや靴は「落ち込んでいてもうきうきする」ほど、Tさんに高揚感を与えた。これらは肯定的認識の装いと判断してよいだろう。

【24】尋常小学校卒業のあと教師になりたい夢と女学校への進学をあきらめて農家の後継ぎになった。やけくそで一生懸命に働いた。生きていたくなかった。農作業のときは木綿生地のかすりだった。母が縫ってくれた。かすりのもんぺを履いた。

【25】母はTさんが好きそうな着物を買ってくれた。綺麗な模様の人絹だった。他所行きのものだった。女子青年の集まりの会合に着ていった。だらっとした模様の羽織を着て、ちゃらちゃらして出かけた。普段の農作業から解放されて嬉しかった。

【26】長女が生まれると夫婦でかわいがった。かわいがるのに夫婦喧嘩をするほどだった。自分が農業をやっている大変だったので、この長女に農家だけはやらせたくなかった。着るものは縫って長女に着せた。綿を入れて作った。これは昔母親が縫ってくれたものだった。

【27】若いときの装いは、普段と外出とで格段の差があった。とんでもない違いだった。外出するときは、袖のあるおたもとだった。でもそれでは稼ぐことができなかった。稼ぐときは、袖のない、筒袖の着物の上っ張りという、動きやすいものを作って着ていた。それは泥がつこうがどうでもよい格好だった。外出のときは嬉しかった。格好よく、体裁よく着て外出した。みんなの真似をしてちゃらちゃらした。農作業の格好のまま外出はできなかった。汚い格好では外出したくなかった。このように2つの顔を持っていて、切り替えをパッパツとしなければならなかった。

Tさんは嫌いな農家の跡を継ぐことになった。そこで登場したのが、非日常の「ハレ」と日常の「ケ」の装いの往復的な切り替え機能をもった装いであった。農業に従事する時の「泥がつこうがどうでもよい格好」【27】を日常のルーティンワークとみなし、逆に農業から解放される際の「ちゃらちゃらした装い」【25】【27】を非日常の娯楽であるとTさんは認識していた。装い自体を楽しむというよりも、装うという行為は、辛い日常からTさんを解放してくれる強力な手段であった。つまり稼ぐ時と遊ぶ時の切り替え装置になっていた。これらの装いは、肯定と否定が共存する

装いといえる。

施設での生活において、Tさんは装いに関心を示さなかった。その代わりに新墾短歌^{にいほり}を生きがいにして自分を表現していた。これは、データ【24】にあるように、教師になる夢をあきらめて農家の後継ぎになったという否定的体験と関連している。教師になれなかった悔しさを取り戻すように新墾短歌^{にいほり}に夢中になっていた。さらにはデータ【28】からも分かるように、Tさんは最愛の存在である長女との関係を何よりも大切にしていた。その長女が持ってくる衣服は、どんなものでも楽しく着ていることから明らかである。

【28】夫も亡くなり落胆していたが、70歳を過ぎてから過労のため脳卒中で倒れた。手術をしたが左半身麻痺になってしまった。こんな身体になってしまって、もう生きていたくなかった。死んでしまいたいと真剣に考えた。だが、長女が「お母さん、たとえどんなかたちでもいいから、生きていて!!」と言ってくれた。その言葉を聞いたとき、泣いた。自分の存在が自分一人だけのものではないことを実感した。

Tさんの精神的自立を支えていたのは自己表現としての新墾短歌^{にいほり}と長女の存在であって、装いではなかった。ただし、Tさんが幼少の頃に体験した「赤い刺繍」【21】【22】のある装いは、現在のTさんにハレとケの切り替えとして機能し、肯定と否定が共存する装いを思い出させる可能性がある。「ちゃらちゃらした装い」【25】【27】と「赤い刺繍」【21】【22】の装いはTさんの生活歴から立ち現れる装いである。

表2は、3人の対象者の生活歴における装いを抽出し、内容分析をした結果、これらを本人が否定的経験と認識しているか、肯定的経験と捉えているか、という観点から整理したものである。

6 結論と課題

以上、措置時代の施設を利用する3人の要介護高齢女性を対象に、彼女たちの生活歴に着目して、装いの主観的意味を探索してきた。その際、2つの分析視角を採用した。1つは現在の装い（＝生活歴から顕在化している装い）であり、もう1つは過去の装い（＝生活歴に潜在化している装い）であった。

前者に関しては、同化と異化、納得と不服の軸により現在の装いをどのように認識しているかを分析した。装いに最もこだわりのあるKさんについては「好きな装い」「薄紫色のカーディガン」は異化の装いであった。しかし同化の装いについては、納得しているかいないかという分析軸が盛り込まれ、同じKさんでも、「動

作がしやすい装い」は納得－同化の装い、また「あるもので間に合わせる装い」は不服－同化の装いであることが示された。これは一人の要介護高齢女性の装いに、多様なパターンがあることを示唆している。さらには、「手がかからない服」のUさんは不服－同化の装い、そして「子どもたちが持ってくる服」のTさんは納得－同化の装いであることも示された。Uさんは「ケア職員に迷惑をかけたくない」という価値観を重視していたため、納得のいく装いが出来なかった。他方、Tさんは、新墾短歌と長女にいほりの存在を何よりも大事にし、「おしゃれに興味ない」と断言した。とはいえ、両者とも身近な他者への気遣いや好意を尊重していた。これらの装いの事実は、同化の装いにも納得か不服かという新たなカテゴリーが存在することを浮き彫りにした。

つまり、現前において、当該高齢女性がおしゃれにこだわっているか否かという単純な捉え方は、ケア職員や家族が個別ケアにおいて装い支援を実行する際に妥当ではない。なぜなら、

表2 生活歴に潜在化している装いの分析結果

| 認識 | Kさん | Uさん | Tさん |
|-----|---|--|--|
| 否定的 | いやでも好きでもない装い【1】 自分の好みと言えない装い【1】 ＝母親が作る服 | みすばらしい格好【16】 ボロの装い、ひどい格好【17】 ＝恥ずかしい | 泥がつこうがどうでもよい格好【27】 ＝嫌いな農業で稼ぐ |
| 肯定的 | 他所行きの着物【3】 ＝自分でこしらえたい | 綺麗で新しい服【11】 外国人の服【11】 ＝もてはやされた | 母が縫ってくれる装い【20】 友達が着ていない装い【23】 ＝いいと思っていた |
| | 好きな装い【3】 ＝地味でも派手でもないもの、薄い色が好み | 胸に刺繍の入った茶色のワンピース【11】 ＝お金持ちの象徴 ハイカラな靴【12】 流行を追う装い【12】 目立つ装い【12】 ＝兄弟の友達から噂される喜び | ちゃらちゃらした装い【25】【27】 ＝普段の農作業から解放されて嬉しい 赤い刺繍の模様がある装い【21】 ＝嬉しくて仕方ない 赤い刺繍が入った靴【22】 ＝落ち込んでいてもうきうきした |

一人の高齢女性の装いには多様なパターンがあるからであり、かつ生活局面において装い以上に重視する価値観を優先させることもあるからだ。

次に、後者の生活歴に潜在化している装いに関しては、肯定的認識と否定的認識の軸で分析した。現前の装いにこだわりがあり肯定的認識を持っているとしても、過去の生活歴にさかのぼると、意外にも否定的認識をともなった装いが立ち現れてきた。たとえば、幼少期のKさんにとって「いやでも好きでもない装い」「自分の好みと言えない装い」は否定的認識をもたらしていた。しかし年齢を重ねるにつれて、こういった否定的認識を乗り越えて肯定感を獲得する過程が描写された。将来自分で「好きな服」を作りたい、そしてそれを身につけたいという夢へと昇華されたわけだ。

これに対して、現前の装いにこだわりが見られなくても、過去の生活歴にさかのぼると立ち現れてくる個性的な装いがある。たとえば、裕福な幼少時代を過ごしたUさんの場合は、新しい「外国人の服」「茶色のワンピース」等が古き良き時代の装いとして生活歴に潜在化していることが示された。現在は「ケア職員に迷惑をかけたくない」という価値観に基づいた「手がかからない服」が生活歴に顕在化している装いとして浮上した。

また、現前のTさんは装いに無関心のように見受けられ、本人もそのように自覚しているのだが、生活歴に潜在化している装いは「ちゃらちゃらした装い」と「泥がつこうがどうでもよい格好」の切り替えの機能を有することが示された。このような装いの切り替えは、公と私、遊びと仕事、ハレ（非日常）とケ（日常）といった生活局面の切り替えと連動し、肯定的な装いによってTさんの否定的な思いを和らげる機能を持っているとの見方ができる。さらにT

さんにとって「赤い刺繍」がついている装いは、子どもの頃に経験した「うきうきする気持ち」と一体化して、肯定的に認識しているものとして生活歴から立ち現れる。

これらの装いは生活歴を把握していないと見えてこない。さらには、ただ把握しているだけでも見えてこない。むしろ生活歴から立ち現れる装いを本人が肯定的か否定的か、いずれの認識を持っているのかという点を見極めることが要請される。

本稿の結論から、ケア現場に示唆できることは、個別ケアを実践する際に、事務的に生活歴を聞き取ればいいのか、とにかく装いやおしゃれを推奨すればいいのか、このような一律なかたちでの装い支援の仕方では、要介護高齢女性の生活の質を高めるための個別ケアには直結しないということである。

過去の装いと現在の装いの関連性からは、「生活歴から顕在化している装い」のみならず、「生活歴に潜在化する装い」にも着目することの重要性が示された。既存の装い研究では、これまで前者に力点が置かれてきた。しかし、本稿では、生活歴に着目することにより、後者の装いにも目を向けて、要介護高齢女性における装いの主観的意味を探索し、生活歴から立ち現れる装いを具体的に浮き彫りにした。

残された課題もある。同化と異化、納得と不服、肯定的と否定的といった分析軸のほかに、生活歴から立ち現れる装いをすくい上げることができる分析軸はないのか。今回は調査対象を施設利用の要介護高齢者に限定したが、分析軸をより精緻化するためにも、今後は、在宅ケアを受ける要介護高齢者や活動的な高齢者にも調査対象を拡げていく必要があるといえよう。

注

¹ 個別ケアとは、高齢者がもつ固有の生活歴・生活リズムを尊重し、各々のペースに合わせたケア生活を支援するという理念である（片桐 2010: 163）。これはケアの「受け手への注目」（井口 2010: 169-170）といえる。

² ただし、高齢者の装いが、アイデンティティや自己とどのようにつながっているのかを検討することは本稿の目的ではない。だが本稿のように高齢女性における装いの主観的意味を明らかにすることは、今後、装いと自己の関係を議論するうえで前提になると思われる。したがって、本稿は装いに関する基礎的研究に位置づけられる。

³ 本稿では、生活歴という表記に統一した。「生活史」（中野 1977）や「ライフヒストリー」（中野・桜井 1995; 谷 2008）といったような方法論的な議論については、別稿を要する。

⁴ この調査は修士論文を執筆するために実施され

た。その後、2004 年度に提出した博士論文（片桐 2005）においても、本施設でケア職員へのインタビューとフィールドワークを継続した。そのため、今回取り上げる対象者 3 人とも雑談する機会があった。

⁵ 生活指導員によると、U さんは亡くなった夫の名義で車椅子を数台、当該施設に寄付したという。U さんはそのうちの一台を使用していた。

⁶ 新墾短歌は、新墾社（本社札幌市）が出版する雑誌で展開される短歌である。新墾社の社長によれば、北海道における愛好家の平均年齢は 76 歳程度である。1930 年から月刊誌『新墾』を発行しており、2010 年には 80 周年記念を迎えた。

⁷ 1904 年生まれの K さんは 2009 年 5 月に 105 歳で老衰にて死亡した。1915 年生まれの U さんは 2005 年 8 月に心不全で死亡、90 歳であった。1922 年生まれの T さんは、2011 年 1 月現在で、89 歳で健在であるが、2010 年 11 月から入院している。

文献

Graham, Jean Ann and Albert M. Kligman, 1984, "Cosmetic Therapy for the Elderly," *Journal of the Society of Cosmetic Chemists*, 35: 133-145.

Graham, Jean Ann and Albert M. Kligman, 1985, "Physical Attractiveness, Cosmetic Use and Self-Perception in the Elderly," *International Journal of Cosmetic Science*, 7(2): 85-97.

Flick, Uwe, 1996, *Qualitative Forschung: Theorie, Methoden, Anwendung in Psychologie und Sozialwissenschaften*, Reinbek bei Hamburg: Rowohlt. (= 2002, 小田博志ほか訳『質的研究入門——「人間の科学」のための方法論』春秋社.)

井口高志, 2010, 「支援・ケアの社会学と家族研究——ケアの『社会化』をめぐる研究を中心に」『家族社会学研究』22(2): 165-176.

伊波和恵・浜治世・西田真弓, 1998, 「高齢女性における化粧を用いた情動活性化の試み——過去の化粧習慣と化粧プログラムにみられる参加継続性との関連」『文京女子大学紀要』2: 81-92.

石田かおり, 1995, 『おしゃれの哲学——現象学的化粧論』理想社.

片桐資津子, 1999, 「長寿化する女性の〈自己表現〉にみるプロダクティビティ——長寿化における『装い』と〈親密な他者〉の観点から」北海道大学大学院教育学研究科 1998 年度修士論文.

- , 2005, 「要介護高齢者と介護職員の脱アサイラム研究——特養ホームにおける介護自治文化の形成過程のフィールドワーク」北海道大学大学院文学研究科 2004 年度博士論文.
- , 2010, 「介護労働とユニット志向ケアの導入プロセス——従来型特養における個別ケアの可能性と限界」『福祉社会学研究』7: 162-181.
- 北山晴一, 1996, 「モードの権力」井上俊ほか編『デザイン・モード・ファッション』岩波書店, 101-122.
- 前田和男, 2009, 『男はなぜ化粧をしたがるのか』集英社.
- 中野卓, 1977, 『口述の生活史——或る女の愛と呪いの日本近代』御茶の水書房.
- 中野卓・桜井厚編, 1995, 『ライフヒストリーの社会学』弘文堂.
- 西本典良, 1999, 「介護・福祉における美容福祉の意義と展望——美容福祉論試論」『フレグランスジャーナル』27(9): 59-62.
- Rexbye, Helle and Jørgen Povlsen, 2007, “Visual Signs of Ageing: What are We Looking at?,” *International Journal of Ageing and Later Life*, 2(1): 61-83.
- 谷富夫編, 2008, 『新版ライフヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社.
- 辻喜美子, 1997, 「痴呆症老人に化粧」『クレアボー』11: 45-49.
- Twigg, Julia, 2004, “The Body, Gender, and Age: Feminist Insights in Social Gerontology,” *Journal of Aging Studies*, 18: 59-73.
- , 2008, “Clothing, Aging and Me: Routes to Research,” *Journal of Aging Studies*, 22: 158-162.
- , 2010, “Clothing and Dementia: A Neglected Dimension?,” *Journal of Aging Studies*, 24: 223-230.
- 鷲田清一, 1996, 「垂直のファッション, 水平のファッション」井上俊ほか編『デザイン・モード・ファッション』岩波書店, 85-100.
- 山岸裕美子, 2000, 「特別養護老人ホームにおける装いの工夫の働きかけ——自然感情を中心とした試み」『繊維機械学会誌』53(6): 237-243.
- 山井理恵, 2001, 「障害者・高齢者を対象とした出張美容サービスをめぐる現状と課題——サービス提供者への面接調査からの分析」『日本の地域福祉』15: 92-101.

(かたぎり しずこ、鹿児島大学法文学部、katagiri@leh.kagoshima-u.ac.jp)
(査読者、井口高志、山井理恵)

Exploratory Study on the Self-Perception of Dress for Elderly Women: Focusing on Influences from Life History

KATAGIRI, Shizuko

The purpose of this article is to explore the subjective meaning of dress for elderly women in nursing home in the late 1990s. Previous research reported on the effects of cosmetic therapy for elderly people with dementia and fashion therapy for those in need of care. However the existing research only looks at current dress sense and no sociological research including qualitative analysis of former dress sense can be found. We do not need to aim at the effects of recommended standardized clothing rather we want to discuss how these women perceive their clothing themselves. This article brings to light the fact that there are some women who at first glance seem to have been indifferent towards their dress but actually latently display multiple clothing patterns throughout their lives.